

COVID-19 が韓国留学中の日本人学生の留学生活に及ぼす 影響の一考察

高柳 有希*・安 龍洙**

(2020 年 11 月 9 日受理)

Influence of COVID-19 on the lives of Japanese Students studying abroad in South Korea

Yuki TAKAYANANGI* and Yong Su AN**

(Received November 9, 2020)

要旨

本稿では、PAC 分析法を用いて、韓国留学中の日本人学生 2 名を対象に COVID-19 が韓国での留学生活に及ぼす影響について調査を行った。その結果、被調査者 2 名に「韓国語を学ぶ環境の悪化」と「大学の対応への不安」といった内容が共通してネガティブなイメージで挙げられた。相違点は、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) (以下 COVID-19) 流行中、韓国で過ごしていた被調査者 A は不便だが貴重な体験ができたとポジティブに捉え、休学して日本で過ごしていた被調査者 B は自身の将来や韓国語能力の低下に対してネガティブに捉えていたことである。このことから、COVID-19 流行という環境下でも韓国に身を置くことで、日本では得難い経験や学びができると明らかになった。オンライン授業については、対面授業に比べて集中力の低下など不便な点が挙げられたが、少人数であればオンラインライブ授業を行うことで効率的な学習ができると分かった。

【キーワード】日本人学生、韓国留学、COVID-19、PAC 分析法

1. はじめに

本研究は、日本社会における日本人と外国人の異文化相互理解について、外国人がどのように理解し評価しているのかを、個人別態度構造分析法 (Analysis of Personal Attitude Construct: PAC 分析法) を用いて、認知的・情意的観点から探る一連の研究の一部である。

*仁済大学文理科学部国際語文学部日語日文専攻 (〒 621-749 Inje-ro 197, Gimhae, Gyeongnam, College of Humanities and Sciences, Faculty of International Language and Literature, Major of Japanese Language and Literature, Inje University)

**茨城大学全学教育機構 (〒 310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

本稿では韓国に留学中の日本人学生2名を対象にPAC分析法を用いて「COVID-19が日本人韓国留学生の留学生活に及ぼす影響」の特徴を探った。

調査は、韓国全国でCOVID-19感染の第1波(2月中旬から3月初旬にかけて、ピーク時の一日における新規感染者は約800人)が落ち着き、第2波(8月中旬から9月初旬にかけてピーク時の一日における新規感染者は約450人)が来る直前の7月(一日における新規感染者は50人前後)に行った。韓国の大学の1学期¹⁾は3月初旬に開講されるため、COVID-19感染の第1波にもかかわらず、当時韓国内の大学は開講の段階で、1学期¹⁾全授業オンラインとする大学と、2週間単位で新規感染者数の様子を見ながらオンライン授業期間を延長するかどうか決定して運営した大学が多かった。被調査者2名が所属する△大学は、後者の2週間単位でオンライン授業期間を延長する方針をとっていて、5月初旬の中間テストは原則的に非対面、6月下旬の期末テストは原則対面で行われた。オンライン授業の運営には、Microsoft teamsというアプリケーションが選ばれ、大学のeラーニングシステムと併用して授業運営された。オンライン授業は主に二通りのやり方があり、教員が事前録画した授業動画を毎週アップロードしていくオンデマンドのオンライン授業と、学生たちとテレビ電話しながら授業をするライブオンライン授業のうち、教員の裁量で授業方法が選択される。また大学側は、テストや実習授業のように大学に登校しなければならない学生や教職員は登校時に大学が開発した自宅診断アプリで問診票を作成し、それを正門で提示し、熱を測って異常がなければ、手をアルコール消毒して校内に入るという体制をとっていた。

これまでに、日本人学生の韓国留学観を探った先行研究としては池田(2014)、高柳・安(2019)などが挙げられる。また、日本人留学生の韓国サブカルチャー観について行った先行研究としては高柳・安(2020)が挙げられる。また、韓国に長期滞在する日本人による韓国観について行った先行研究としては石鍋・安・高柳(2020)が挙げられる。これらの研究は、日本人学生及び日本人がCOVID-19流行以前の韓国生活からどのようなことを感じていたのかを示している。本研究では、COVID-19流行下における日本人学生の韓国留学生活について考察し、先行研究と比較しながらCOVID-19が韓国留学中の日本人学生の留学生活に与えた影響を分析したい。

池田(2014)では韓国仁済大学で実施された3週間の夏季語学研修に参加した日本人学生を対象に、彼らの海外留学に対するイメージ及び意識の変化を探った。その結果、複数の学生に「異文化体験に大きな意義を感じる」「韓国語を学びたいという気持ちがより一層強まった一方で、留学において言語を重視しない」「留学を自分自身の成長の場だと考える」「留学自体の不安より、留学制度や帰国後の状況が不安」という点が共通して見られた。

高柳・安(2019)では日本人韓国留学生を対象に彼らの韓国留学観について探った。その結果、1回目の調査では、「人と人との距離が近い」「一人で行動(ご飯)しにくい」「酒文化」という項目が被調査者3名に共通して挙げられ、「人と人との距離が近い」に関しては、驚くがプラスに捉え、「一人で行動(ご飯)しにくい」「酒文化」に関してはマイナスに捉えていた。2回目の調査では、「韓国の文化に慣れた」「日本に関心を持ってくれる(親切にしてくれる)人が多い」「韓国語に限らず韓国に関わる仕事したい(将来の選択肢が増えた)」「服は意外と無難(他人と同じにする)」「酒文化」「交通費が安い」という項目が2名以上共通して見受けられ、特に「韓国に慣れた」という特徴が強く窺え、帰国直前に行った3回目の調査では、被調査者3人に共通して2回目からあまり変化がないこと、韓国に慣れて日韓の違いを意識しなくなったことが示されたが、お酒の文化に関してはネガティブな印象が変わらないか、もしくは強まる傾向があると示された。

高柳・安(2020)では日本人韓国留学生を対象に彼らが韓国のサブカルチャーを通じて韓国を

どのようにとらえているのかについて探った。その結果、1 回目の調査では、「Kpop (Kpop ダンス)」が被調査者 3 名に、「美容」「韓国コスメ (メイク品)」「カフェ」「お酒」というイメージが被調査者 2 名に共通して挙げられ、これらほぼ全てがプラスに捉えられていた。帰国直前に行った 2 回目の調査では、「ヒップホップが多く存在する」「Kpop が街に溢れている」「音楽番組のほとんどを Kpop が占めている」など、Kpop や音楽番組に関するイメージが、留学生活を通して追加及び強化される傾向があることが伺えた。また、韓国のサブカルチャーや若者文化について Kpop などに代表される若者文化からだけではなく、食文化や価値観など日常の習慣まで含めた広い視野からとらえていることが示された。

石鍋・安・高柳 (2020) では韓国に長期滞在する日本語教師を対象に彼らの韓国観について探った。その結果、対象 3 名ともポジティブな韓国観を抱えていることが示された。対象が受け持っている学生に加え現地の韓国人との接触に関する項目が各対象に共通して確認され、対象 A と対象 B は長期滞在による韓国観の変化を示唆するクラスターが認められ、対象 C は韓国観の変化を示唆するクラスターは認められなかったが、クラスター 1 (「日韓の歴史」) の発話スクリプトにおいては韓国観の変化を示唆する発話が見られた。全体を通して、長期滞在による韓国人との接触頻度がポジティブな韓国観への変化の影響要因となっていることが示された。

本研究では、韓国の同じ大学に留学中の日本人交換留学生 1 名と日本人学部生 1 名を対象に、COVID-19 の感染予防対策下 (2020 年 7 月) に PAC 分析法を用いて、COVID-19 が韓国留学に及ぼす影響について検証した。

2. 調査方法

調査は、1 部と 2 部に分けられる。1 部は質問紙による調査で、調査協力者の属性を尋ねるフェイスシートと「COVID-19 が韓国留学に及ぼす影響」に対するイメージ評価からなっている。1 部のイメージ評価の手順は以下の通りである。

- (1) あなたは「COVID-19 が韓国留学に及ぼす影響」という表現からどんなイメージが思い浮かびますか？思い浮かんだイメージを「単語、または短い文」で下の【質問 I・記入例】のように【質問 I】に記入してください。上記①～③はイメージ項目に入れて、あなた自身のイメージを 7 個以上書き、全体のイメージ項目が 10 個以上になるようにしてください。
- (2) (1) で書いたそれぞれの「単語か短い文」が、プラス・マイナスのイメージに関係なく、あなたが「COVID-19 が韓国留学に及ぼす影響」を考える時に、重要と考える順番に並べ替えてください。
- (3) 次に、「重要イメージ」のイメージ項目同士を比較して、二つの組み合わせがどの程度近いのか、判断していただきます。最初に、①と②を比較します。①と②の関係が、直感的なイメージやその内容から見て、どの程度近いのか、次の尺度で判断して、「1、2、3、…」と書いてください。同じ要領で、①と③、①と④・・・というふうに、最後の組み合わせまで比較して、記号 1、2、3 などで書いてください。尺度は、非常に近い=1 / かなり近い=2 / いくぶん近い=3 / どちらともいえない=4 / いくぶん遠い=5 / かなり遠い=6 / 非常に遠い=7 とします。

上記 (3) において作成された「重要イメージ対比表」を基に、ウォード法でクラスター分析をし、デンドログラムを作成した上で、2 部のインタビューによる調査を行った。2 部の調査では個々の調査協力者のデンドログラムに基づき、インタビューによる調査を行った。まず、調査協力者にクラスター分析を行ったデンドログラムを見せ、各項目についての説明やクラスター分けについての

解釈について尋ねた。最後に、連想項目のイメージについて、プラスイメージの場合は (+)、マイナスイメージの場合は (-)、どちらともいえない場合は (0) の記号を記入してもらい、各イメージを抱くようになったきっかけや媒体などを尋ねた。

なお、調査は1学期が終わってすぐの2020年7月にカカオトーク (SNS アプリケーション) の音声通話を利用して行われた。被調査者2名のインタビュー時の状態は以下の通りである。

<被調査者 A (日本人交換留学生)>

韓国滞在歴：約1年

インタビュー場所：韓国にある被調査者 A の知人宅

当時の状況：交換留学生として△大学で韓国語を勉強中。2019年8月末から交換留学をスタートさせ、COVID-19の感染拡大防止のための日韓渡航規制が実行される前に韓国に入国していたため、そのまま韓国で留学生活を送った。

<被調査者 B (日本人学部生)>

韓国滞在歴：約1年半

インタビュー場所：日本にある被調査者 B の自宅

当時の状況：△大学の人文文化融合学部 of 学部生として韓国語を勉強中。

先学期の冬休み (2019年12月末) に日本に一時帰国中、COVID-19の感染が拡大し、そのまま2020年度1学期を休学して日本に留まった。

3. 結果

ここでは、まずクラスター分析の結果を示し被調査者自身の解釈について述べる。

3.1. 被調査者 A

図1は被調査者 A (日本人交換留学生) のデンドログラムである。

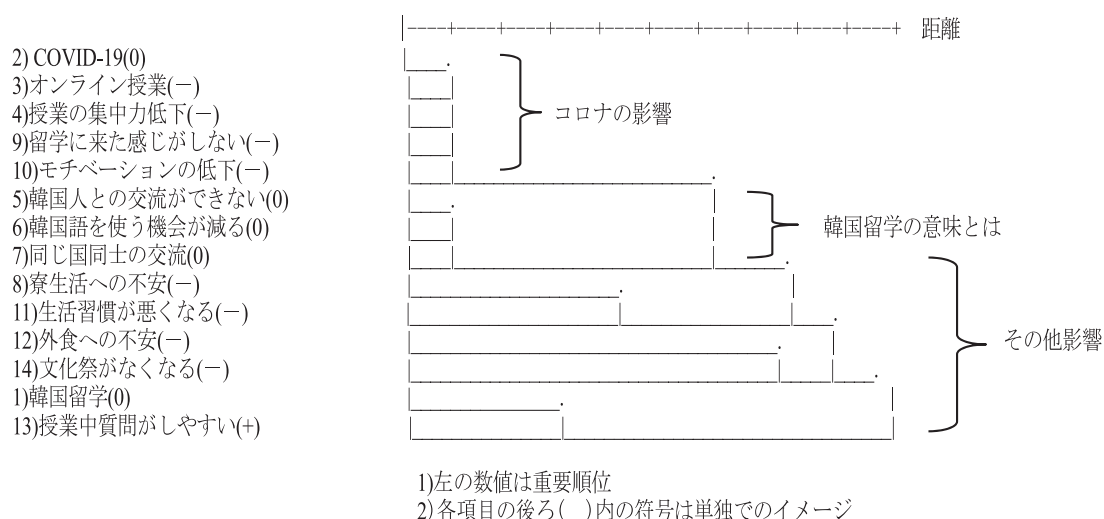


図1 被調査者 A のデンドログラム

被調査者 A のクラスター1～クラスター3までのクラスター解釈のインタビュー内容を以下の表1に示す。また、クラスター名については、クラスター1を「コロナの影響」、クラスター2を「韓国留学の意味とは」、クラスター3を「その他影響」とした。

表1 被調査者 A のクラスター解釈

<p>クラスター1：『2) COVID-19 (0)』『3) オンライン授業 (－)』『4) 授業の集中力低下 (－)』『9) 留学に来た感じがしない (－)』『10) モチベーションの低下 (－)』</p> <p>対面して授業をするのが私は好きなので、先生の顔とか見ながら授業できればもっとよかったなという感じですかね。</p> <p>録画されているのを見るやつだと、例えば、なんか分かんないことがあったときにすぐ聞けないのが不便だと思ってしまいましたね。</p> <p>ビデオのときは、もし例えば分かんないのがあったら、その場では聞けないのでメモして、後で先生にLINE、カカオトークして聞くみたいな。手間がかかる。</p> <p>時間割の時間（ライブオンライン授業）なんですけど、人数多過ぎて先生もみんなの顔が見られないので、みんなが全然、話を聞いてなくて、自分の番が来たときに、え、何、みたいなのが多くて。全然授業が進まなかったことがあるんですよ。</p> <p>なんか物足りない感じ…みんなで授業終わってカフェで勉強したりとか、あとは飲み会に行ったりとかカラオケ行ったりとか、そういうのが全然なくなって。私はもうずっと家にいるし、寮にいる子たちもずっと寮にいたい感じがなので。これ、普通に日本でもできるんじゃないかなみたいな。</p> <p>TOPIK（韓国語能力試験）の受験を読み書きのモチベーションにしていたんですけど、それもコロナでなくなっちゃったんで、もうずっと会話しかしてないって感じですね。</p>
<p>クラスター2：『5) 韓国人との交流ができない (0)』『6) 韓国語を使う機会が減る (0)』『7) 同じ国同士の交流 (0)』</p> <p>私は、先学期から仲良くなった韓国人の友達や〇がいるので、交流はできてるほうだと思います。〇の家族と一緒に、住ませてもらって毎日韓国語って感じです。でも今学期から留学が始まっていたら交流は難しかったかなって。</p> <p>日本語教育実習もやる予定だったので、もっといろんな日本語を学びたい韓国人の子たちとかと、もっと交流ができたと思うんですけど、それもなくなっちゃったので。</p> <p>〇の家族との生活は、最初はちょっと緊張したりとかしてたんですけど、だんだんお互い慣れてきたってうか、最初すごく申し訳ないのがあったんですけど、まあ、結構〇とかが、「いや、いていいよ」みたいな、「寮にいるよりかはこっちにいたほうが、まあご飯も食べれるし、いいでしょ」って、こう、言ってくださって。寮だと、コロナ対策で料理禁止なんで、不便だなんて感じでなんですけど。こっちにいとやっぱ料理ができるんで。本当に恵まれてるなって思いますね。</p>
<p>クラスター3：『8) 寮生活への不安 (－)』『11) 生活習慣が悪くなる (－)』『12) 外食への不安 (－)』『14) 文化祭がなくなる (－)』『1) 韓国留学 (0)』『13) 授業中質問がしやすい (+)』</p> <p>寄宿舎が中国から来た人たちの隔離するための所になっていたんですけど、その間目の前の寄宿舎に移されても（意味がないんじゃないか）という不安と、隔離が終わった後にもととの寄宿舎に戻されるってなって防疫は大丈夫かという不安があって。</p> <p>オンラインのビデオの授業はいつでも見られるので、もう昼夜逆転になっちゃって、夜ずっと起きて朝に寝て、夕方起きて授業見てみたいな感じでしたね。</p> <p>外食に行くのはやっぱりめっちゃめっちゃ減りました。最近、外に出て食べるんですけど、最初の1、2カ月ぐらいは、もうずっとコンビニで買うか、自分で自炊するか、出前をとるかでした。</p> <p>4月に予定されていた学祭がなくなっちゃって、めっちゃめっちゃショックでしたね。</p> <p>文法とか読み書きの授業だと、オンライン授業でも人数が少なかったんで、すぐ質問ができる感じだったんですね。前学期に比べてより質問しやすく、より先生と会話できました。</p>
<p>クラスター全体</p> <p>後輩で後期に留学に来る予定だった子たちが多いんですけど、それがもう全部キャンセルになっちゃってるので。そう考えると時期は良かったのかなって感じですかね。</p> <p>日本にいるよりかはやっぱり韓国にいたほうが、まあ留学感を感じられるというか、ああ、韓国にいるんだなって、感じられるので。これは結構マイナスじゃなくて、私はプラス面で考えてますね。</p> <p>コロナのおかげで、今こういう、（韓国人の〇と）一緒に住める機会ができたので。もしコロナがなかったら、違う楽しみがあったんだろうけど、まあでも、この生活もすごく貴重な時間なので。全部が全部、悪いとは言えないって感じですかね。人脈があったのが一番。</p> <p>おうち時間で、刺しゅうをやってみたのと、あと、YouTubeの翻訳や（韓国の）オンラインゲームも、〇と一緒にちょっとやってみました。ゲーム以外では使わないような単語とか名前とか覚えました。</p>

クラスター1では、主に韓国語の学習環境に関するCOVID-19の影響を話していて、授業や、カフェなどを利用した授業外学習環境の不便さを訴えている。特に授業に関して、被調査者Aは授業を集中して受けようとしても、オンライン授業により集中力の途切れたクラスメイトからマイナスの影響を受けていることも分かる。オンライン授業については、「先生の顔が見れたほうがいい」や「分からないことがあったときにすぐに聞けないのが不便」など、非対面授業ならではの不便さが窺える。授業外に感じる不便さとしてはカフェでの自主学習がしにくくなったり、カラオケや飲み会などの娯楽に全く行けなくなったことを挙げている。日本人韓国留学生が韓国の「カフェ」にポジティブなイメージを持っているのは高柳・安(2020)からも分かるが、今回のCOVID-19の流行により、長時間利用しやすいカフェのような韓国の魅力を十分に満喫できなくなったことへの不満が窺える。

クラスター2では、主に韓国語を使った韓国人との交流について話をしている。これに関しても学習環境と同様マイナスの影響が出ているかと思いきや、被調査者Aは韓国の家庭に受け入れてもらい一緒に生活することになり、むしろCOVID-19による緊急事態にならなければ体験することができなかったような韓国家族との会話や生活を体験することができたと話した。被調査者Aも、このような緊急事態に日本人を自分の家庭に受け入れて面倒をみてくれたということに感謝しており、これは高柳・安(2019)でも見られた「日本に関心を持ってくれる(親切にしてくれる)人が多い」という日本人留学生が韓国に感じた印象にも通じるものがある。また、大学の寮での対応として、寮内では防疫のため料理禁止というルールが設けられており、被調査者Aはそれを不便に感じたと言う。

クラスター3では、学校行事や生活環境に関するCOVID-19の影響について話している。被調査者Aが、大学内の中国人留学生用隔離施設の防疫に対する不安や、生活リズムの乱れ、学校行事の中止をマイナスに感じていることが分かる。開講当時の3月初旬、特に中国の武漢市を中心に中国人のCOVID-19感染者が多かったため、大学は中国人留学生を1つの寄宿舍に固めて隔離していた。しかし、その他の韓国人学生及び留学生が生活する寄宿舍は隔離寄宿舍の目の前なので、建物を分けたところで防疫がしっかりとできるか被調査者Aは不安に感じていた。被調査者Aは特に、楽しみにしていた学校祭が中止になったことはショックが大きかったと話す。また、オンデマンドのオンライン授業は大人数の授業での進行がスムーズという良い点もあるが、いつでも視聴ができる反面、午後にゆっくり起きて深夜に講義動画を視聴する生活習慣がついてしまい、昼夜逆転してしまったことが大変だったと話している。しかし、少人数でリアルタイムオンライン授業が行われた授業に関しては、対面授業よりも質問がしやすく学習のしやすさを感じていた。

全体として、被調査者Aは留学中にCOVID-19が流行したことで受けた影響はマイナスなことばかりではなく、むしろこの緊急時だからこそ得られた経験があるとプラスに捉え、貴重な時間であったと振り返っていることが特徴的である。

3.2. 被調査者B

図2は被調査者B(日本人学部生)のデンドログラムである。

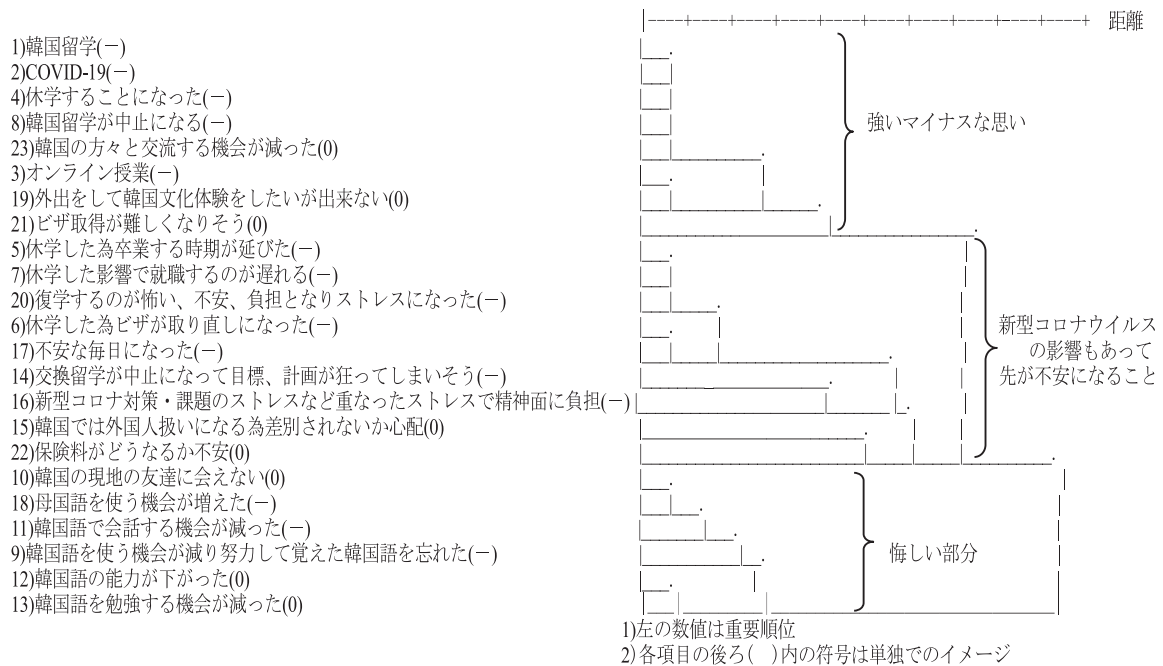


図2 被調査者Bのデンドログラム

被調査者Bのクラスター1～クラスター3までのクラスター解釈のインタビュー内容を以下の表1に示す。また、クラスター名については、クラスター1を「強いマイナスな思い」、クラスター2を「新型コロナウイルスの影響もあって先が不安になること」、クラスター3を「悔しい部分」とした。

表2 被調査者Bのクラスター解釈

<p>クラスター1:『1) 韓国留学 (-)』『2) COVID-19 (-)』『4) 休学することになった (-)』『8) 韓国留学が中止になる (-)』『23) 韓国の方々と交流する機会が減った (0)』『3) オンライン授業 (-)』『19) 外出をして韓国文化体験をしたいが出来ない (0)』『21) ビザ取得が難しくなりそう (0)』</p> <p>□ (身体的理由) があることもあって、コロナの対策として薬とか予防とか何も出てなくて怖かったので、休学を希望して。…国際交流所の先生に△大学はオンライン授業をするか尋ねたら、その時はオンラインはありえないって言われて。いろいろ対処法は自分の中で考えたんですけど、もうオンラインもないって言われたから、最終手段で休学って決めたんです。韓国に1回戻ってくるつもりで準備していたところ、○から1学期¹⁾(履修) どうしますかみたいな調査が入ったのは2月の20日過ぎ開校直前で。</p> <p>オンラインでできるって言われたら、まず日本で受けてもいいのかっていう許可を聞きたいのと、あと、教授によってはやっぱりそれが難しいっていう方もいたり、いろんなご意見があると思うんですけど、私的にはオンラインができるなら、もう日本で受けたい気持ちでした。</p> <p>同じ人に連絡するっていう頻度は増えたんですけど、幅広い人間関係で考えたら人数は減りました。</p> <p>コロナもなく韓国にいたら、授業として、文化体験をしに、韓国文化体験をしに行けたり、あとは友達と授業じゃなくて、文化体験(韓服体験)をできる施設に行ったりしようと考えてたので。</p> <p>韓国に戻ったらすぐビザ申請をしに行こうかなって自分の中では計画立てていて、でももう国際交流所の先生から、もう休学した時点でビザはなくなったから、戻ってくるときはまた、あの、韓国領事館に行って申請してねって言われて。</p> <p>コロナがはやりだしての3月、4月とかはもう、毎日1回体温計で熱を測って、弁当が部屋に配布されてたみたいで。…体温測る身体のチェックは、ネットで自分たちで4時になったら、みんなで絶対送らないといけないうルールがあって。送ってない人は国際交流所から連絡が来ます。</p>
--

<p>クラスター2:『5) 休学した為卒業する時期が延びた (-)』『7) 休学した影響で就職するのが遅れる (-)』『20) 復学するのが怖い、不安、負担となりストレスになった (-)』『6) 休学した為ビザが取り直しになった (-)』『17) 不安な毎日になった (-)』『14) 交換留学が中止になって目標、計画が狂ってしまいそう (-)』『16) 新型コロナ対策・課題のストレスなど重なったストレスで精神面に負担 (-)』『15) 韓国では外国人扱いになる為差別されないか心配 (0)』『22) 保険料がどうなるか不安 (0)』</p> <p>まず卒業したら韓国で就職して、韓国での社会経験を2年間ほどして、いずれは日本で長く就職っていう形を考えてるんですけど。韓国で社会を踏んで日本っていう、その計画も卒業が遅れるっていう影響でちょっと考え直すかなと今思ってます。</p> <p>日本にいながら韓国語は勉強してたんですけど、やっぱり学校で勉強毎日韓国語を使う生活と比べると日本に来たら韓国語使う機会も減ったし、やっぱりレポートの書き方とか韓国のパソコンの使い方とか、学校に関わってたことから一気に離れたので、また戻ってゼロからやり直すのを考えると、復学するのも怖いし、不安。</p> <p>2学期²⁾には復学しますって大学に言ったら、入学許可証が学校側から送られてきて、あとは韓国領事館に行って申請をすればいい話なんですけど、また、そのビザを申請しに行くのにも、電車とか乗ったりして、行くまでもコロナ感染がちょっと怖い。</p> <p>大学でのその課題とかが出てきたときに、やっぱり毎回ストレスは大きかったんですけど、私の場合は、コロナのせいで1学期分、間が空いての復学になるので尚更課題のストレスが大きくなるのではと。</p> <p>病院が私いたときに、日本の名前で呼ばれるので、そのたびに「はーっ」て、また見られたと思って。普段やっぱり日本を嫌ってる方とか、日本をまだ受け入れられない方とかもいる中で、プラス、コロナっていう、さらに「コロナあるのに日本から来たの!」ってなると、そういう差別をされないかっていうのも不安です。</p>
<p>クラスター3:『10) 韓国の現地の友達に会えない (0)』『18) 母国語を使う機会が増えた (-)』『11) 韓国語で会話する機会が減った (-)』『9) 韓国語を使う機会が減り努力して覚えた韓国語を忘れた (-)』『12) 韓国語の能力が下がった (0)』『13) 韓国語を勉強する機会が減った (0)』</p> <p>韓国語学力がちょっと低下したかなっていう。</p> <p>実際に直接会って話せば、自然に出る若者言葉とか、私が知らない言葉を、直で聞いたりとかできたんですけど、やっぱり文だと私のレベルに合わせて韓国の方も書いてくれるので、ありがたいんですけど、なんかちょっと申し訳ないのと、直接会って気楽に話したいっていう思いもありますね。</p> <p>ふと、なんか韓国語でしゃべりたい、文を打ちたいってなったときに、言葉が出てこないとか、もっと高級レベルな言葉、使えるのに、高級レベルの韓国語が出てこないとか。…今まで自然と学んでいた韓国語が学べないっていうのが影響してるのかなって思いました。</p>
<p>クラスター全体</p> <p>コロナで左右されたって感じます。今の現状もだし、これからの先が全てコロナによって崩された感じはします。</p>

クラスター1では、COVID-19の影響で、特に強くマイナスに感じられることについて話している。COVID-19への急な対応を迫られた学校の、今後に関する急な連絡や、授業の実施形態に関して先が予想できない状況があったため、被調査者Bは仕方なく休学を選択した。△大学は、1学期¹⁾開講の段階ではすべてオンライン授業という判断ではなく、状況を確認しながら2週間単位でオンライン授業の期間を延長していくという形をとっていた。また、被調査者Bを含む外国人留学生が帰国するかどうかの判断をする段階では、オンラインでの授業実施はないだろうと伝えられていた。しかし結局、COVID-19の感染状況は改善されず、1学期¹⁾全てオンライン授業が実施されることになるが、被調査者Bは、もしはじめてから1学期¹⁾全てオンライン授業だと分かっていたなら、日本に帰国後も日本にいながらオンラインで履修したかったと悔やんでいる。また、COVID-19がなければ、授業で行う韓国文化体験や、個人的に友達と行こうと計画していた韓服体験の計画もなくなってしまい、残念に感じている。日本にいながらSNS等で韓国の友達と連絡はとれるが、限られた人との交流になってしまい、幅広い交流は減ったと話す。また、一度日本に帰国したことにより、2学期²⁾に復学する際は韓国領事館に行ってビザを再発行してもらわなくてはならず、と

ても不便を感じている。また、被調査者 B の話によれば、△大学の寄宿舎に住む留学生たちは当時、毎日午後 4 時に自分の体温を測って国際交流所の先生に報告せねばならず、それを怠った場合には国際交流所の先生から個人的に連絡が来るというルールが定められていたという。

クラスター 2 では、COVID-19 の影響により休学することになった被調査者 B が、主に自らの将来設計について不安を話している。被調査者 B は、本来であれば、休学をせずに大学を 4 年間で卒業して、韓国で社会人経験をした後、その経験を活かして日本で就業するという計画であった。しかし、今回の休学により卒業が遅れて計画が狂ってしまい、計画を変更して韓国就職をあきらめるかもしれないとも話す。また、レポートの書き方や韓国のパソコンの使い方など、先学期に課題提出の度に苦労しながらやっと慣れてきたと感じたものが、休学によって忘れてしまい、復学後の学部生生活が不安だと話す。さらには、ビザの再取得のために満員電車を利用して韓国領事館に向かわなければならないなど、COVID-19 感染のリスクを冒さなくてはいけない恐怖も感じている。また、COVID-19 の影響で、韓国の中で日本のことをよく思っていなかったり、日本のことを受け入れられない人たちの日本人への嫌悪感が増し、被調査者 B 自身が復学した際にも「コロナ感染者の多い日本から来た」と差別されるのではないかと不安を感じている。これは、被調査者 A や高柳・安 (2019) で見られた「日本に関心を持ってくれる (親切にしてくれる) 人が多い (+)」 「日本を好きな人が思ったより多い (+)」というイメージ、石鍋・安・高柳 (2020) で見られた「反日は思ったより感じない (+)」というイメージと反対である。このことから、COVID-19 流行前にはむしろプラスに捉えられていたイメージ項目が、日本での COVID-19 の感染拡大により、マイナスに変化していることが分かる。

クラスター 3 では、主に韓国語能力の低下について話している。被調査者 B は、被調査者 A のように韓国に友人はいても、被調査者 B 自身が韓国にいないので、どうしても SNS を通してのコミュニケーションになってしまい、韓国にいて気軽に電話したり直接会って話したりする機会が減ってしまったと話す。これまで、直接会って話しながら知らない言葉や若者言葉を学んでいた被調査者 B にとって、直接会って話す機会がなくなることは、マイナスの影響であると言える。また、被調査者 B は、これまで問題なく使えていたはずの上級表現などが「出てこなく」なり、これは今まで自然と学べていた韓国語が、COVID-19 の影響で学べない環境になったことに影響しているのではないかと話す。

全体として、被調査者 B は COVID-19 によってこの先が全て崩されてしまったようだと話し、COVID-19 発生後の生活をかなりマイナスにとらえていることが窺える。

4. 考察

4.1. 被調査者 2 名の共通点

2 名の被調査者が共通して話していたのは、「韓国語を学ぶ環境の悪化」と「大学の対応への不安」で、どちらもマイナスな内容である。「韓国語を学ぶ環境の悪化」について、被調査者 A は韓国にいて知人の家族とも過ごしていたため、韓国人との交流はそれなりにできていたと話す。大学のオンライン授業で不便を感じたり、学外での活動の減少や、カフェなど今までよく利用していた学習スペースの利用ができないことなどに不便を感じていた。被調査者 B は COVID-19 により休学を選択して日本に帰国したため、韓国語に触れる機会が極端に減ってしまい、今後の授業や学習に不安を抱いていた。「大学の対応への不安」については、被調査者 A は感染拡大が大きかった中国からの留学生を隔離する寄宿舎の防疫が確実に行われるかという不安、被調査者 B は先が予想で

きない大学の学事日程に不安を感じていた。

4.2. 被調査者2名の相違点

2名の被調査者の大きな違いは、COVID-19による影響をネガティブに捉えているか、ポジティブに捉えているかである。被調査者Aは、生活に不便は感じながらも受け入れてくれた韓国人家族との生活や、韓国語でオンラインゲームを楽しむなどおうち時間を楽しみながら、そこで使われる韓国語を学ぶことができた。しかし、被調査者Bは休学による将来に不安を抱き、韓国語能力や韓国の大学での生活能力（レポート提出など）の低下を心配していた。2名の違いとして、被調査者Aは1年の交換留学でCOVID-19対策中も韓国で生活を送り、被調査者Bは4年間の学部留學生でCOVID-19対策中は休学し日本で生活を送っていたという違いがある。今回の調査で現れた2名の相違点は、置かれた環境の違いによるものが大きいと考えられる。

やはりCOVID-19流行という緊急事態で普通と違う環境下でも、被調査者Aの場合、韓国に身を置くことで、日本では得難い経験や学びを得ることができ、留学を継続させたことに意味があったのではないかとと思われる。

4.3. オンライン授業に対する評価

実際に韓国でオンライン授業を受けていた被調査者Aと、休学してオンライン授業を受けなかった被調査者Bの両者のオンライン授業に対する評価について見ていく。オンライン授業には「オンデマンド授業」と「ライブ授業」の2種類があり、それぞれ授業の担当教師の裁量により授業方式が選択され、被調査者Aは各スタイルの授業を受けていた。

「オンデマンド授業」の良い点としては、いつでも見られること、大人数の授業では「ライブ授業」より内容の進行がスムーズであることを挙げていた。しかし、悪い点として、いつでも見られる「オンデマンド授業」は深夜にも視聴することもできるため、生活リズムが昼夜逆転してしまうということ、教師の顔が見られなくて寂しいということ、質問をすぐにできないということを挙げていた。「ライブ授業」の良い点としては、少人数の授業では発言の機会が増え、質問もしやすいことを挙げ、対面授業よりも勉強になったと回答している。しかし、悪い点として、大人数の授業では集中していない学生の影響で進行が滞りやすい点を挙げ、大人数の授業の場合は「オンデマンド授業」のほうがよかったと回答している。「オンデマンド授業」と「ライブ授業」2種類のオンライン授業に共通して、少人数に限った「ライブ授業」以外は集中力の低下などモチベーションの低下が窺えた。

また、オンライン授業に対する△大学の対応として、1学期¹⁾開講の段階ではすべてオンライン授業という判断ではなく、状況を確認しながら2週間単位でオンライン授業の期間を延長していくという形をとっていた。そのため、被調査者Bのように日本帰国後もオンライン授業であれば日本から履修したいと考える学生にとっては、今後の方針を決めづらい状況であったことが窺える。

4.4. コロナ禍における海外留学に対する不安

COVID-19流行時、韓国で留學生活を送っていた被調査者Aと、休学という選択をして日本で生活を送っていた被調査者Bの両者のコロナ禍における海外留学に対する不安という点に着目すると、大きく分けて、1) 将来に関する不安、2) 「感染に対する不安」、3) 韓国での生活に対する不安があることが分かった。

「将来に対する不安」としては、中長期的な問題と短期的な問題が同時に存在することが分かった。

被調査者 B の場合、中長期的な問題としては、休学により大学卒業の遅れが生じ、入学当初に計画していた卒業後の計画（韓国で 2 年ほど社会人経験を積む）をあきらめようかと悩んでいることが挙げられる。このことから、COVID-19 が留学生の人生設計に大きな影響を及ぼしていることが分かる。また、短期的な問題としては「ビザの再取得をどうするか」「いつ復学するか」「休学中に落ちてしまった韓国語のスキルやレポート作成スキル、韓国のパソコンスキルで復学後にやっつけけるか」ということで不安を感じていることが挙げられる。一方、被調査者 A は本来であれば留学中に行う予定だった日本語教育実習が COVID-19 のせいではなくなったことについて残念だと話しているが、帰国後に何らかの形で実習が行えるということもあり（実際に日本帰国後の 2 学期²⁾にオンラインで実習が行われた）、将来や今後の計画について強く不安を抱えている様子ではなかった。

「感染に対する不安」としては、ビザを取るために韓国領事館に行く際の感染リスクや、大学内での感染リスクに関する不安が挙げられる。被調査者 A と被調査者 B の話から、1 学期¹⁾には留学生寮が一時的に中国人留学生用隔離施設になっていたこともあり、隔離解除後に元いた留学生寮に戻った際、防疫が徹底しているのか不安に思っていた。

「生活に対する不安」としては、被調査者 A の話から防疫のため寄宿舍での料理が禁止のため、食事が不便ということや、外食への不安など、食事に関する不安が挙げられる。また、被調査者 B は COVID-19 流行前に、韓国の病院で日本人の名前が呼ばれた時の周りからの視線を気にしており、日本に対し抵抗感がある人たちからの更なる差別視を不安に思っていた。また、先述したように、休学中に落ちてしまった韓国語のスキルやレポート作成スキル、韓国のパソコンスキルで復学後にやっつけけるのか留学生活にも不安を抱いていた。

5. まとめと今後の課題

今回の調査では、COVID-19 が日本人韓国留学生に及ぼす影響として、「韓国語を学ぶ環境の悪化」と「大学の対応への不安」といった内容が共通して挙げられ、ネガティブなイメージで捉えられていた。また、相違点としては、韓国で過ごしていた被調査者 A は不便ながらも貴重な体験ができたというポジティブな捉え、休学して日本で過ごしていた被調査者 B は自身の将来や韓国語能力の低下に対してネガティブに捉えていた。各自置かれた環境の違いにより、結果に大きな差があったと思われるが、留学を続けた場合、COVID-19 流行という普通と違う環境下でも韓国に身を置くことで、日本では得難い経験や学びをすることができるということが明らかになった。また、オンライン授業では対面授業に比べてモチベーションや集中力の低下など不便な点が挙げられる中、少人数であればオンラインの「ライブ授業」を行うことで対面授業よりも効率的な学習につながることが分かった。また、「オンデマンド授業」は教師の顔が見えなかったり質問がリアルタイムでしにくいという点が挙げられる中、多人数であれば「ライブ授業」よりスムーズな進行がされて効率が良いことが分かった。また、日本人留学生のコロナ禍における海外留学に対する不安について見ていくと、大きく分けて、中長期的な「将来に関する不安」と、「感染に対する不安」、食事や反日感情、学業など「韓国での生活に対する不安」があることが分かった。

今後は、韓国に留学中の日本人学生の COVID-19 の影響だけでなく、対象者を韓国の大学に在学中の韓国人学生にしたり、日本に留学中の韓国人学生にして考察することで、COVID-19 が留学に与える影響についてより多角的に検討していきたい。

付記

本研究の一部は日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究 (C) (課題番号 17K02838, 研究代表者: 安龍洙) の助成を受けて行われた。

注

- 1) 韓国の大学の1学期。日本の大学でいう「前期」である。期間は毎年3月初旬～6月末。
- 2) 韓国の大学の2学期。日本の大学でいう「後期」である。期間は毎年9月初旬～12月末。

引用文献

- 池田庸子 (2014) 「海外留学に対するイメージ及び意識の変化—韓国語学研修参加者の場合—」『茨城大学留学生センター紀要』12, 15-18.
- 高柳有希・安龍洙 (2019) 「日本人学生の韓国留学観の変化に関する一考察」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』2, 91-102.
- 高柳有希・安龍洙 (2020) 「日本人韓国留学生は韓国のサブカルチャーを通して韓国をどう捉えているか」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』3, 135-144.
- 石鍋浩・安龍洙・高柳有希 (2020) 「韓国に長期滞在する日本人による韓国観の態度構造」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』3, 53-65.